

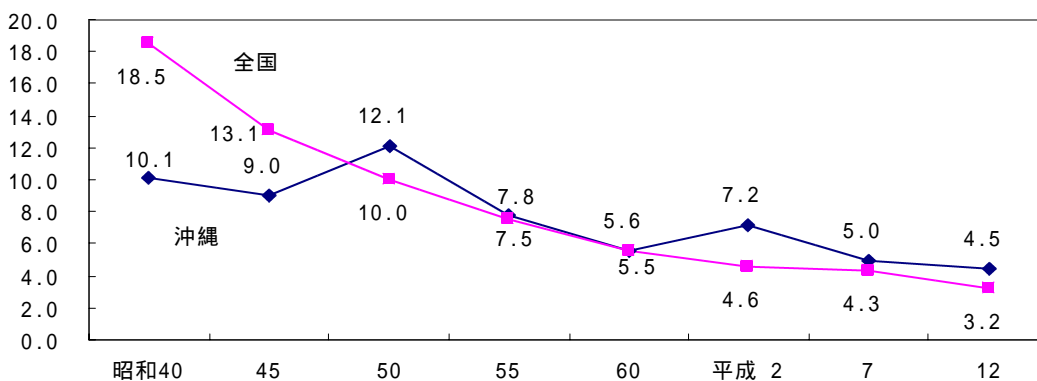
## 2 母子保健の主なる統計

### (1) 乳児死亡率及び死因の状況

昭和40年から平成12年までの出生千対の乳児死亡率の推移をみると、昭和40年には、全国18.5に対し、本県10.1と低かったが、昭和50年以降は常に全国より高くなっている。

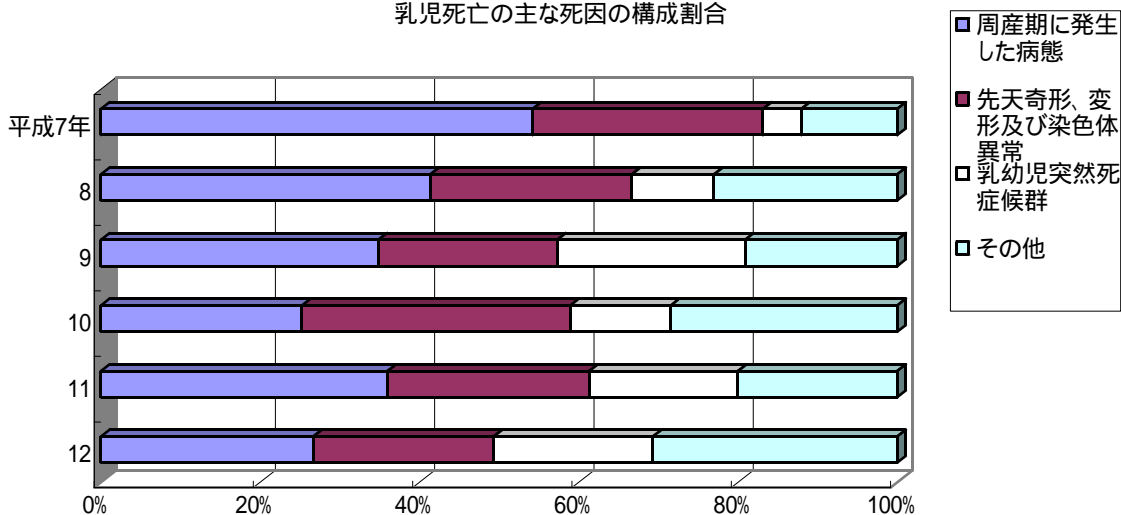
また、乳児死亡の原因をみると、周産期に発生した病態や先天性の疾病及び乳幼児突然死症候群などが占めている。

乳児死亡率(出生千対)の年次推移



資料：沖縄県福祉保健部「衛生統計年報」、厚生労働省「母子保健の主なる統計」

乳児死亡の主な死因の構成割合



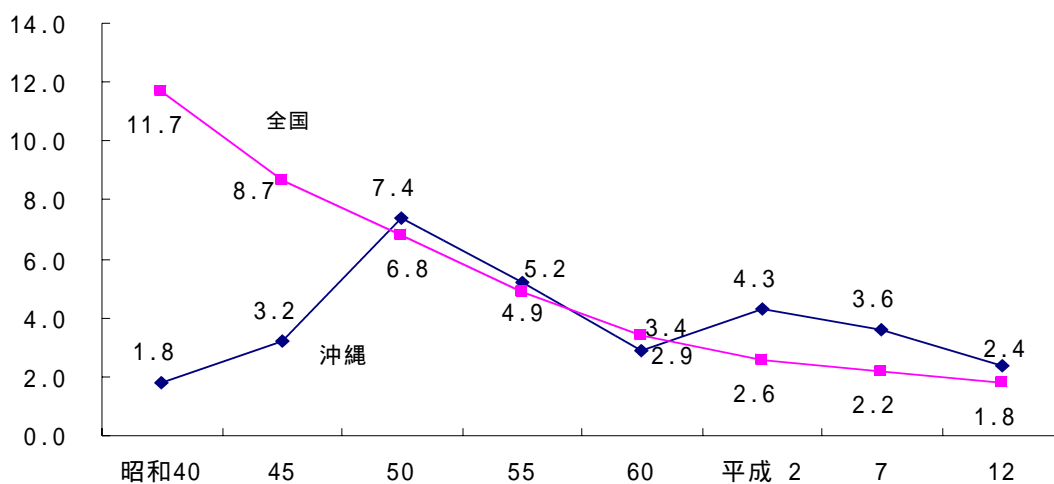
資料：沖縄県福祉保健部「衛生統計年報」

## (2) 新生児死亡率及び死因の状況

乳児死亡の約6割を占める新生児死亡率(出生千対)は、平成2年以降は常に全国より高い状況にある。

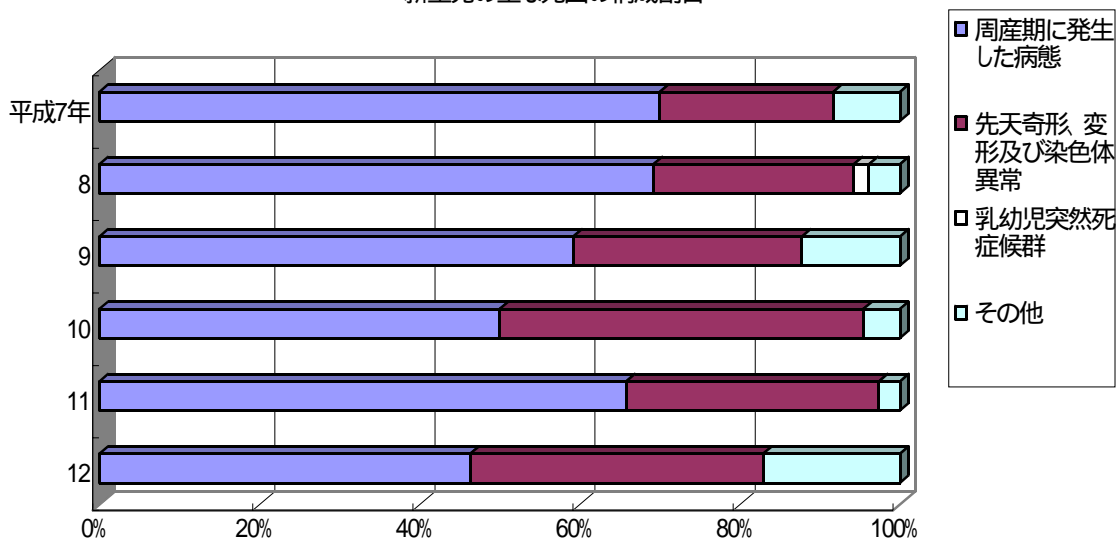
また、新生児死亡の主な死因は、周産期に発生した病態と先天的な疾病となっている。

新生児死亡率の推移



資料：沖縄県福祉保健部「衛生統計年報」、厚生労働省「母子保健の主なる統計」

新生児の主な死因の構成割合

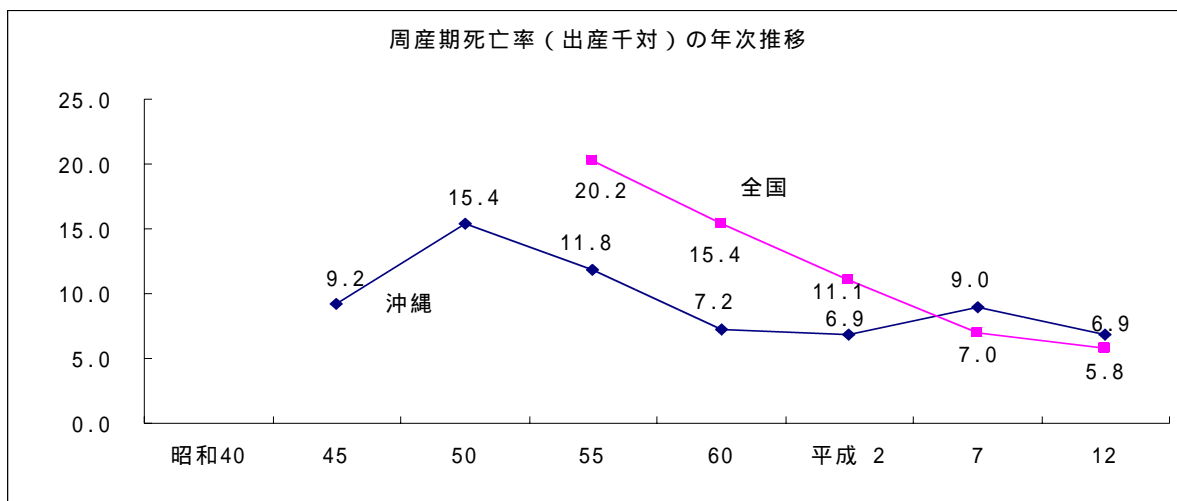


資料：沖縄県福祉保健部「衛生統計年報」

### (3) 周産期死亡率

周産期死亡率は、全国の場合、最も高かった昭和55年の20.2から、年々低下しており、平成12年は5.8と激減した。

本県も、昭和50年の15.4から平成2年6.9と半減してきたが、平成7年以降は常に全国より高い位置で推移している。



注1) 沖縄県の周産期死亡は、平成6年までは妊娠満28週、平成7年度からは妊娠満22週以後の死産と早期新生児死亡数をあわせたもの。

注2) 昭和40年～昭和50年にかけては一部データ不詳である。

資料：沖縄県福祉保健部「衛生統計年報」、厚生労働省「母子保健の主なる統計」

### (4) 0歳から19歳までの死因別死亡状況

0歳から19歳までの5歳階級別の死因の推移をみると、0歳から4歳までは、順位の入替わりがあるものの、主に周産期に発生した病態や先天異常及び乳幼児突然死症候群が占めている。その他の年齢では、不慮の事故や悪性新生物での死亡が多くなっている。その中でも15歳から19歳の年齢では平成7年から12年まで常に死因の1位は不慮の事故となっている。

年齢階級別死因順位（三大死因）の年次推移

0～4歳

	死亡 総数	第1位			第2位			第3位		
		死 因	実数	率	死 因	実数	率	死 因	実数	率
平成 7	102	先天異常	29	28.4	出産時外傷	17	16.7	感染症	13	12.7
平成 8	111	呼吸障害	36	32.4	先天異常	23	20.7	不慮の事故	10	9.0
平成 9	114	周産期に発生 した病態	32	28.1	先天異常	23	20.2	乳幼児突然死 症候群	21	18.4
平成 10	121	先天異常	35	28.9	周産期に発生 した病態	24	19.8	乳幼児突然死 症候群	12	9.9
平成 11	100	乳幼児突然死 症候群	14	14.0	循環器系の先 天奇形	12	12.0	特異的な呼吸 障害	11	11.0
平成 12	95	周産期に発生 した病態	20	21.1	先天異常	18	18.9	乳幼児突然死 症候群	16	16.8

5～9歳

	死亡 総数	第1位			第2位			第3位		
		死 因	実数	率	死 因	実数	率	死 因	実数	率
平成 7	21	不慮の事故	8	38.1	悪性新生物	4	19.0	損傷及び中毒	3	14.3
平成 8	8	不慮の事故	4	50.0	悪性新生物	2	25.0	心疾患	1	12.5
平成 9	16	悪性新生物	5	31.3	不慮の事故	5	31.3	先天異常	3	18.8
平成 10	12	不慮の事故	9	75.0	悪性新生物、高血圧性疾患、インフルエンザ			1	8.3	
平成 11	11	不慮の事故	3	27.3	悪性新生物	2	18.2	複数あり	1	9.1
平成 12	11	悪性新生物	5	45.5	内分泌・栄養及び代謝疾患、中枢神経系のそ 他の新生物			3	27.3	

10～14歳

	死亡 総数	第1位			第2位			第3位		
		死 因	実数	率	死 因	実数	率	死 因	実数	率
平成 7	9	悪性新生物	3	33.3	不慮の事故	2	22.2	複数あり	1	11.1
平成 8	20	不慮の事故	6	30.0	悪性新生物	4	20.0	喘息	3	15.0
平成 9	15	不慮の事故	5	33.3	悪性新生物	4	26.7	複数あり	1	6.7
平成 10	21	悪性新生物	5	23.8	不慮の事故	4	19.0	自殺	3	14.3
平成 11	14	悪性新生物	4	28.6	血液および造血器の疾患、心疾患、脳血管疾 患、不慮の事故			2	14.3	
平成 12	6	感染症及び寄生虫症、中枢神経系のその他の新生物、ヘルニア及び腸 閉塞、先天性異常、不慮の事故、自殺						1	16.7	

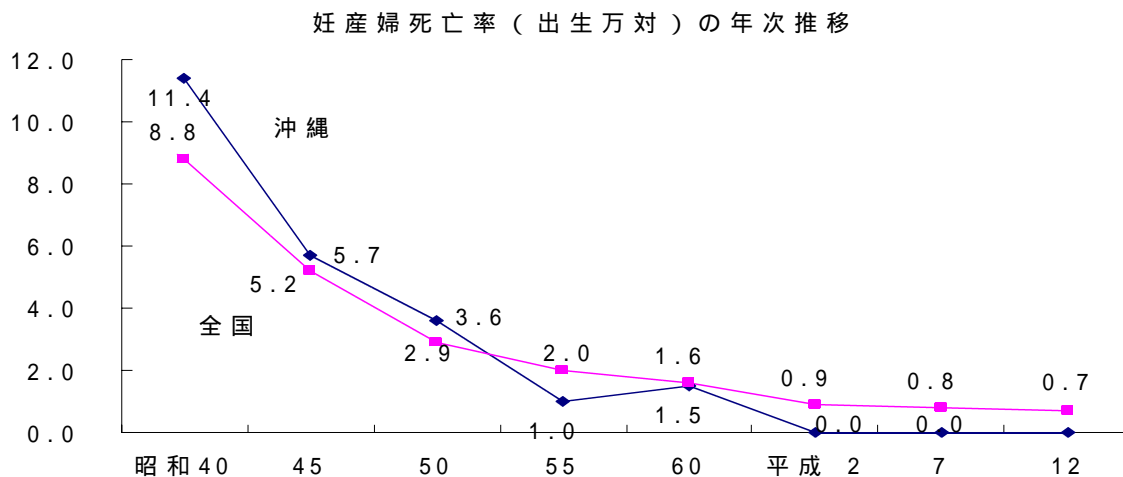
15～19歳

	死亡 総数	第1位			第2位			第3位		
		死 因	実数	率	死 因	実数	率	死 因	実数	率
平成 7	54	不慮の事故	33	61.1	悪性新生物	6	11.1	自殺、心疾 患	3	5.6
平成 8	39	不慮の事故	23	59.0	自殺	3	7.7	悪性新生物、 心疾患	2	5.1
平成 9	52	不慮の事故	32	61.5	悪性新生物	4	7.7	自殺	4	7.7
平成 10	42	不慮の事故	24	57.1	自殺	7	16.7	心疾患、先天 異常		4.8
平成 11	33	不慮の事故	20	60.6	悪性新生物	4	12.1	自殺、その他 の外因	3	9.1
平成 12	39	不慮の事故	25	64.1	悪性新生物、自殺			5	12.8	

資料：沖縄県福祉保健部「衛生統計年報」

( 5 ) 妊産婦死亡率

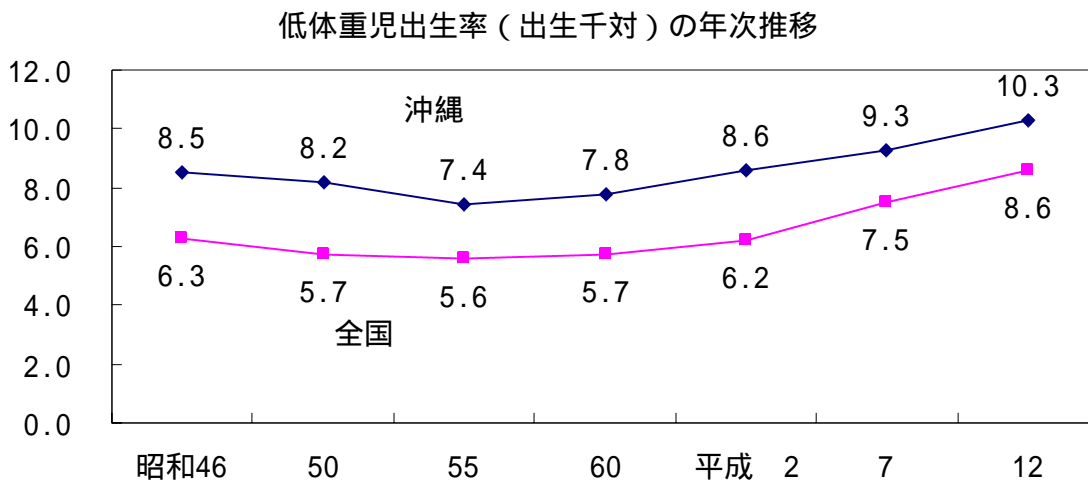
妊産婦死亡率は、昭和40年全国8.8に対し、本県は11.4と高かったが、平成2年、平成7年、平成12年はそれぞれ0となっている。全国も漸次低下してきている。



資料：沖縄県福祉保健部「衛生統計年報」、厚生労働省「母子保健の主なる統計」

( 6 ) 低体重児出生率

低体重児の出生率は常に全国より高位で推移している。



注1) 母子保健法の改正により平成7年度から「低体重児」は 2,500g 以下=>2,500g 未満となった。

資料：沖縄県福祉保健部「衛生統計年報」

( 7 ) 母親の年齢別出生

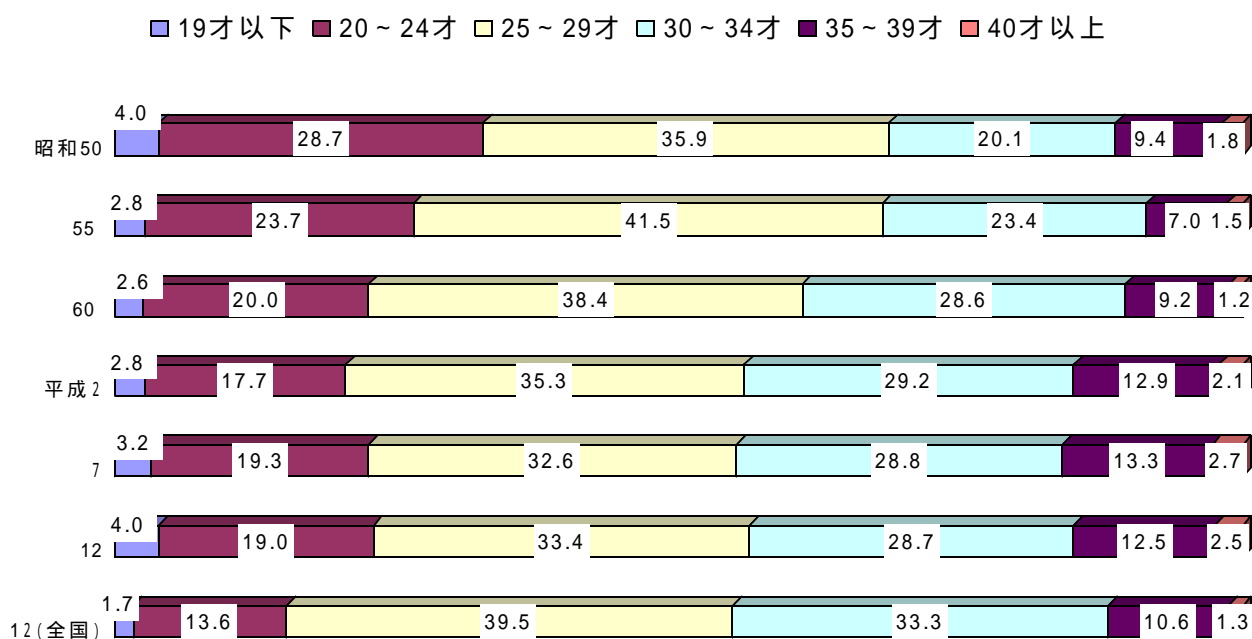
母親の出産年齢の推移を5歳階級別で見ると、最も多い年齢層は25歳～29歳だが、30歳～34歳の年齢層においても、昭和60年以降増えてきている。

また、20歳から24歳の年齢層は低下傾向にあるが、19歳以下の若年層は平成2年以降からは増えてきている。

平成12年を全国と比較してみると、19歳以下では、全国1.7%に対し、本県は4.0%と2倍以上高くなっている。

また、35歳以上も、全国11.9%に対し、本県15.0%と高くなっている。

母親の年齢階級別に見た出生児の年次別構成比

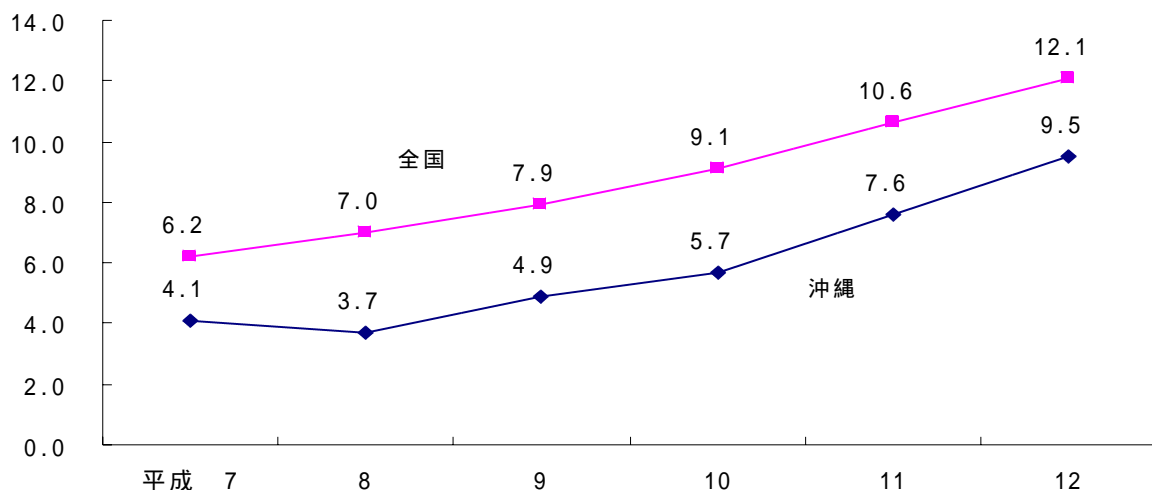


( 8 ) 10代の人工妊娠中絶の状況

15歳以上30歳未満の女子人口(千対)に占める10代の人工妊娠中絶は、全国、本県ともに年々増えている。

また、人工妊娠中絶総数に占める割合の推移をみると、全国、本県とも増えており、特に本県の場合、平成7年から平成12年の間で約2倍弱増えている。

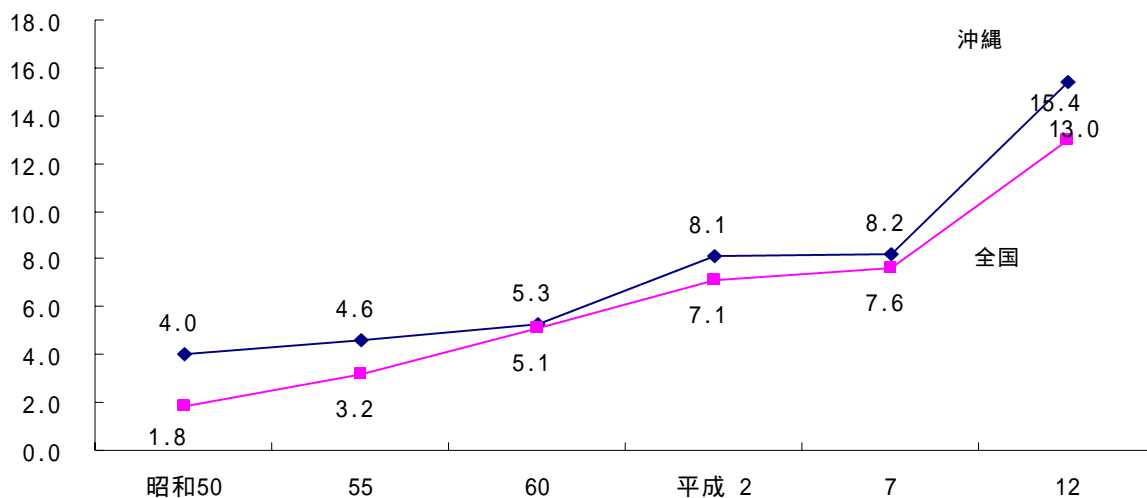
10代の人工妊娠中絶実施率



注) 中絶率は15歳以上20歳未満女子人口千対。(総務庁統計局推計)

資料: 沖縄県福祉保健部「衛生統計年報」、厚生労働省「母体保護統計報告」

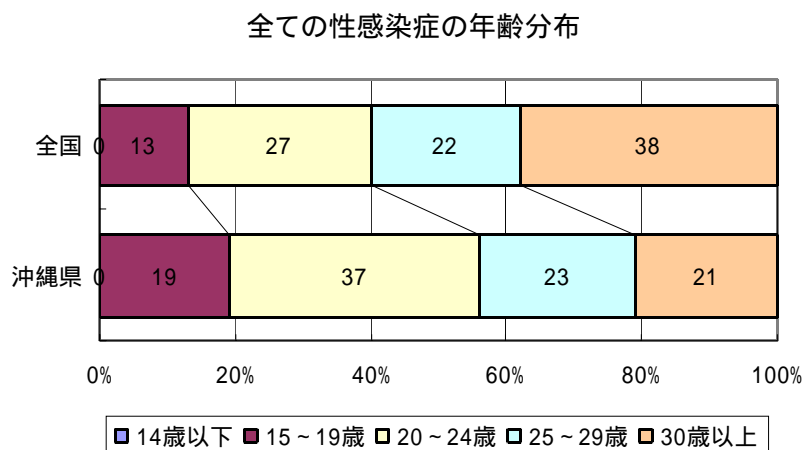
(%) 人口妊娠中絶総数に占める10代の割合年次推移(沖縄・全国)



資料: 沖縄県福祉保健部「衛生統計年報」、厚生労働省「母体保護統計報告」

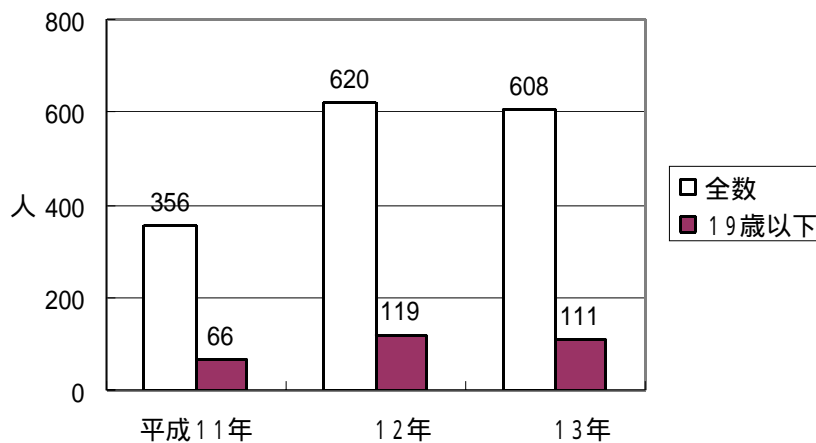
( 9 ) 全ての性感染症の年齢分布

平成12年12月末の性感染症の定点情報で、全ての性感染症の年齢分布では、20代が最も多く全国62%、本県79%で全国よりも高い状況にある。



資料：沖縄県福祉保健部健康増進課（平成12年12月末の定点情報）

未成年者の性感染症患者数



資料：沖縄県福祉保健部健康増進課（平成12年12月末の定点情報）